

アジア10カ国・地域の研究者、田川で成果発表へ あす県立大

アジアの10カ国・地域の大学院生や研究者が「科学技術に基づいたものづくりを地域の中にとどるように溶け込ませていくか」をテーマに研究成果を発表する国際会議（朝日新聞社など後援）が10月1日午前9時から、田川市伊田の県立大で開かれる。

共同国際シンポジウムは、地域活性化をねらいに、科学や化学、工学、社会科学と医科学の融合を試みる場として地域振興学会（理事長、星野宗広・マルボシ酢会長）が主催する。

同学会によると、会議には韓国やフィリピン、ベトナム、台湾などの25大学と7企業研究所の関係者約100人が来訪。このうち70人が発表する。研究発表は原則として英語だが、医科学や予防医療など一般傍聴者の関心が高い分野は日本語で発表されるという。

冒頭の記念講演では、バイオコークス研究の第一人者で、近畿大の井田民男教授ら3人が話す。続いて、歯科医師が口腔内から見た誤嚥性肺炎予防について話すなど専門家4人による基調講演があり、その後、バイオマスや地域医療、介護医療などについて一般講演がある。

同学会の星野理事長は「田川の地を世界にアピールする絶好の機会。今後も田川で2年に一度開いていきたい」と話している。

一般の傍聴は自由。問い合わせは同学会事務局（0947・47・1710）へ。